ビルマ・ラカイン地域の反植民地運動

——アラカン・ディフェンス・フォースの分析——

武島良成

はじめに

本小稿では、ビルマのラカイン[1]地域の反植民地運動が、日本占領期を挟んでいかに展開したのかを、アラカン・ディフェンス・フォース[2]と呼ばれた武装勢力の動静に注目しつつ検討する。ラカイン地域の反植民地運動は、日本占領期から戦後にかけて共産勢力が主導することとなり、軍事化・武装蜂起を手段としての目的達成が強く志向されていた。そしてその軍事力の中心となったのが、アラカン・ディフェンス・フォースであった。よってこの部隊は、同地域の反植民地運動の主要素だったともいえ、その分析は同運動の消長を捉える有効・妥当な手段に成り得る。

そしてその分析の結果、日本占領期がラカインの反植民地運動史上でいかなる意味を持ったのか、一定の評価を下すことも可能となる。さらには、ビルマ（本土）の民族運動との関係を追うことで、この時期のビルマ民族運動の成長の有無やその特質、独立後のビルマが抱えることになった民族問題・内戦の起源についても、新たな発見・提言ができるだろう。

ビルマ（本土）との関係について少し詳しく述べておくと、ラカインの反植民地運動は、一九四五～四六年には、全ビルマレベルで成長しつつあった旧タキン党員が指導する政治組織＝パサパラ[3]（一九四四年夏に結成、アウン・サンを議長とし、後を継いだウー・ヌの下で独立後に政権を担う）に取り込まれることになった。

タキン（パサパラ）は日本占領期に正規軍[4]を委ねられ、国防大臣のアウン・サンはこれを対日「反乱」に振り向け、ビルマ国軍（四五年に一時愛国ビルマ軍）はパサパラ傘下に収められたが、

アラカン・ディフェンス・フォースもこの正規軍に属していた時期を持つ。また後には、パサパラの私兵的組織でありその対英交渉時には有力な後ろ盾となったＰＶＯに属していた形跡もある。このようにアラカン・ディフェンス・フォースは、パサパラの有力化に貢献し、ラカインの地で同組織を支えることになったのである。

しかし、ラカインの運動家たちは早くも一九四七年にはパサパラとの亀裂を深め、これと決別することになる。そして最終的には、パサパラ政府と軍事的に衝突することになる。その闘争の本質が、共産主義理念へのこだわりにあったのか、ラカインのビルマからの分離独立の要求にあったのか、パサパラ幹部の権力争いにあったのかは早急に結論は出せないが、少なくともこの時までの彼らの武装化は、一九四八年以後本格化したビルマ内戦の激化の前提としても見逃せない意味を持ったといえる。このようにラカインの反植民地勢力の軍事化は、殆ど指摘されてこなかった話だが、「成長」と捉えられる反面、内戦の前提としても重要なのである。

以上のように、本小稿はアラカン・ディフェンス・フォースを視角としてラカインの反植民地運動を分析し、さらに日本占領期のビルマ史（主に政治史）上での意義にも言及しようとするものである。

このうち、ビルマ民族運動史上における日本占領期の意味については、筆者自身、最近の二つの論文で言及した話だが、[5] 少なくとも相対的な運動の成長、ナショナリズムの深化・広域化があったことを指摘できる。しかし、この筆者の分析も主にビルマ族が住む平野部を中心とした検討であり、これ以前になされた研究でも、山岳地帯の少数民族の動向やそのビルマ（本土）との関わりを、反植民地運動の文脈や軍事化という視点から捉えたものは殆どなかった。

例外的に、カレン族については大野徹氏の纏め[6]があるが、これも三〇年近く前のものでもあり、入手できる史料の制約もあり概説的なものに止まっている。また、カレン族とビルマ族の関係悪化に関する、一〇数年前の田辺寿夫氏の指摘[7]にしても、反植民地運動の観点から書かれたものではない。

ラカインについても、テーラーの'Burma in the Anti-Fascist War'[8]や、根本敬氏の「ビルマ抗日闘争の史的考察」[9]などの比較的新しい研究で、反植民地運動との関わりの中で採り上げられてはいるが、いずれもこの地域の分析を主題としたものではない。その上テーラー論文は、ビルマ人の活動家テイン・ペーの回想記[10]と、ビルマ側の編纂物『ペシ・トーフランイェー・タナジョウ・

フニン・タイン・セータイン』[11]を該当部分のほとんど唯一の根拠としており、史料批判という問題が残ってしまっている。

この点根本氏の方は、ビルマ国防省が所蔵するテイン・ペーの一九四五年段階の文書やその他の当時の史料も使用し[12]、イギリス側とビルマ人ゲリラの共闘に至る過程を、ある程度実証的に押さえることに成功している。とはいえ、あくまで六、七ページ程度の簡単な分析であり、アラカン・ディフェンス・フォースについても直接には言及されていない。また、ゲリラの源流やこれが日本軍が顧問を送り込んでいた組織だったことも記されていない。さらには、本小稿で提示するような、彼らの軍事的習熟を内戦の前提と捉える見方も示されているわけではない。

また、前記のビルマ側の編纂物『ペシ・トーフランイェー・タナジョウ・フニン・タイン・セータイン』（以下『トーフランイェー』と記す）にしても、現代史に客観的分析を望むのが困難な国情の下で書かれているため、その記述を直ちに事実と見做すべきではなく、一定の吟味が必要となる。中でも「ビルマ国軍中心史観[13]」の影響を強く受けた結果、タキンたちが最初から反日だったという点が極端に強調されたり[14]、その対日蜂起での戦果がかなり多めに算定されているが、それらの点はまずは疑ってかかった方がよい。また日本側の意図の分析の不十分さも指摘でき、さらには独立後の内戦への影響についてもふれられてはいない。これは、「ファシスト日本」への抵抗の「栄光の」歴史を、それだけで完結させようとする配慮の結果だとも推察される。

筆者はこのような研究状況を受けて検討を行っていくが、史料については、日本軍に関係する原史料やイギリス側の電報集[15]（本小稿では『バーマ』と記す）など、ある意味当然参照されるべきだったものを新たに使用する。また、朝日新聞記者の丸山静雄氏が一九四四年にアラカン・ディフェンス・フォースの顧問の田中大尉に行った取材のメモ[16]（以下「田中談話」と記す）のように、存在が知られていなかったものも導入する。さらに、ラカインの運動家のボウン・パウッ・ター・チョーの回想記『トーフランイェー・カイー・ウェー』[17]（以下『カイー』と記す）も使いつつ戦後の情勢も展望するが、その際、根本氏に提供していただいたビルマ国防省の史料も重要な判断材料とする。

なお本小稿は二章構成とするが、第一章で対日蜂起までのアラカン・ディフェンス・フォースにふれ、第二章ではそれ以後の同隊にふれることとする。

① ラカインはインド（現バングラデシュ）との国境に近い地域で、ビルマ族と風俗面では大差ないラカイン族が多く住む。英語では'Arakan'（アラカン）と呼ばれ、日本でもそう呼ばれることが多い。なお

「ラカイン」の語は、ビルマ語では通常「ヤカイン」と発音するが、古い発音を残しているラカイン言葉を尊重して、この地に関する固有名詞は原則的にラカイン式に記した。

② 「アラカン・ディフェンス・フォース」の名は、「田中談話」（朝日新聞記者の丸山静雄氏が、同隊顧問の田中征六郎大尉に一九四四年末に取材した時のメモ。用紙八枚に手書き、丸山氏が所蔵、「田中談話」の名は筆者（武島）が命名）に見られるように、日本軍の当時の呼称である。「田中談話」では他にも「アラカンＢＩＡ」の名称が使われているが、当時のビルマ側・イギリス側の史料に「アラカン・ディフェンス・フォース」の呼び方が見えることから、こちらの方が一般性を持つものといえ、筆者もこの名を使う（例えば、ビルマ人の反日活動家であるテイン・ペーの一九四五年頃の文書（注⑫を参照）や、四五年三月一七日の、ラカイン駐屯中の英軍プリースコット准将の報告（注⑮で挙げる『バーマ』一七五頁の欄外に掲載）でこの名称が使われている。

③ パサパラの語（単語の頭文字を繋いだ略称）が使われているのは厳密には一九四五年半ば以降だが（当初はパタパ、パタパラの語が使われていた）、本小稿では繁雑化を避けてパサパラで通す。対日蜂起を起こした四五年前半期には、その主構成者はアウン・サンの率いるビルマ軍、タキン・タン・トゥンやタキン・ソゥの率いる共産党、ウー・バ・ジャンの東亜青年連盟（アーシャ・ルーゲー）などだった。

④ ビルマ正規軍は、日本軍の南機関が亡命中のアウン・サンら「三〇人志士」を後押ししてつくったＢＩＡ（ビルマ独立義勇軍）をルーツとする。ビルマに侵攻して膨張し、一旦縮小して正規軍とした時にＢＤＡ、一九四三年八月の「独立」後はビルマ国軍と名前が変わった。パサパラの対日「反乱」時にはその主力となったが、その後復帰したイギリスの圧力で一九四五年夏には半減させられた。この除隊者を基幹としつつ、一九四六年春以降本格的に組織されたのがＰＶＯである。

⑤ 拙稿「東亜青年連盟（アシャルーゲー）の成長とビルマ独立への影響――その組織を中心に――」（『史林』七九巻二号、一九九六年）、「ビルマにおける東亜青年連盟の〝五つの力〟（バラ・ンガーダン）活動」（『歴史学研究』六九六号、一九九七年）。なおこれらの論文以前の、日本占領期のビルマ民族運動の成長の程度については、必ずしも「定説」といえる程の有力な見解があったわけではない。その一応の整理は、根本敬「ビルマ近・現代史研究における〝日本占領期〟の扱われ方」（『東南アジア――歴史と文化』一四号、一九八五年）を参照。

⑥ 大野徹「ビルマにおけるカレン民族の独立闘争史」（一）、『東南アジア研究』七巻三号、一九六九年。

⑦ 内海愛子・田辺寿夫『アジアからみた「大東亜共栄圏」』、一九八三年、梨の木舎、二〇〇～二〇二頁。

⑧ R. H. Taylor 'Burma in the Anti-Fascist War', A. McCoy "Southeast Asia undaer the Japanese Occupation, Yale University Southeast Asia Studies, New York, 1980, pp. 159-190.

⑨ 根本敬「ビルマ抗日闘争の史的考察」（共著『東南アジアのナショナリズムにおける都市と農村』、一九九一年、東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所）、ラカイン関係の記述は一六一～一六六頁。

⑩ Thein Pe Myint / R. H. Taylor 'Wartime Traverler', 1963 / 1984, in "Marxism and Resistance in Burma 1942-1945", Ohio University Press, Columbus. 以下『ウォータイム・トラベラー』と記す。テイン・ペー（テイン・ペー・ミンの名でも知られる）は共産党に所属し

ており、日本軍との共存を拒否してインドに亡命、その地でビルマの反日勢力を支援した。

⑪ thək'in tin mya. "p'ɛ? si? tol'anye: t'ana.jou? n'in. tain: s'tain:", l'a. mo sapetai?, Yangon, 1968. 仮訳『反ファシスト革命司令部と一〇の軍管区』。

⑫ 注②で挙げたティン・ペーの文書（DR34 'Patriotic Activities in Arakan'）や DR4863 のうち、'Pay Abstract for the Whole PBF Establishment for the Period from the 1st April to 30th. Sep. 1945'、その他 DR380 'List of PBF Personnel (Guerillas) in Arakan excluding Sandoway District' など。なお筆者は根本氏が筆写したこれらの史料をコピーさせていただいた。

⑬ 同史観とその問題点については前掲根本論文一五一～一五二頁を参照。ビルマ国軍が「帝国主義のイギリス」や「ファシスト日本」を追い払った主役だったとする歴史観である。

⑭ これはタキン自身が日本軍を引き込んだことからしても、過度には強調できない話である。ウー・ヌやウー・バ・スェの回想にも、初めの頃は日本軍を信用する向きが強かった旨記されている（ウー・ヌ「日本占領下のビルマ」『中央公論』七九九号、一九五五年、一一五頁、U Ba Swe "The Burmese Revolution", People's Literature Committee & House, Yangon, 1952, pp. 33-34.）。

⑮ Hugh Tinker "Burma-The Struggle for Independence 1944-1948", Her Majesty's Stationery Office, London, 1983. 上下二巻本。

⑯ 注②を参照。

⑰ boun pau? tha cɔ"tol'anye: k'ayi: we", yəmou? na sape, Mandalay, 1975. 仮訳『革命の道程にて』。

第一章　対日蜂起までのアラカン・ディフェンス・フォース

第一節　アラカン・ディフェンス・フォース以前

アラカン・ディフェンス・フォースの起源について、ティン・ペーは一九四五年頃に書かれた文書 'Patriotic Activities in Arakan'[①]（史料番号は DR34）で、在地の反植民地運動勢力であるアラカン・ナショナル・コングレスがその前身だったとしている。確かに「田中談話」でも、名の挙げられたアラカン・ディフェンス・フォースの幹部の半数以上はアラカン・ナショナル・コングレス系であり、その役割の大きさは確認できる。

だが一方、アラカン・ディフェンス・フォースの起源をＢＩＡに求めた史料もある。「田中談話」自体、ＢＩＡ参加者が「続々集ま」ったとも記しているし、この部隊を「アラカンＢＩＡ」とも呼んでいる。またイギリス軍のブリースコット准将の一九四五年の報告[②]でも、アラカン・ディフェンス・フォースは日本軍がＢＩＡが軍に変わるのを認めたものだとされている。

このように同隊の起源については二つの説が存在するのだが、これは互いに矛盾するものではない。というのも、アラカン・ナ

ショナル・コングレスはタキン党に近い立場にあった組織であるし（後述）、ＢＩＡもタキン党が基幹となって成立したものだからである。つまり、アラカン・ナショナル・コングレスとＢＩＡとでは一定の重複があったことを予測できるし、実際ディフェンス・フォースの最初のリーダーとなったウー・ピン・ニャ・ティー・ハは、ナショナル・コングレスからＢＩＡに入り、その後ディフェンス・フォースに加わっている（アラカン・ナショナル・コングレスのメンバーだったことは「田中談話」に、ＢＩＡに加わっていたことは『ウォータイム・トラベラー』二七四頁[3]に見られる）。

その重複の割合については明示できる史料は手元にないが、いずれにせよアラカン・ディフェンス・フォースのルーツは、アラカン・ナショナル・コングレスやＢＩＡなどの、タキン系統の反植民地勢力だったといえるのである。

このうちアラカン・ナショナル・コングレスについては、ほとんど存在を知られていないので、関連史料を挙げ補足説明を行っておく。例えば、丸山静雄氏が一九四四年一〇月に光機関の加藤大尉に取材したメモ[4]では、一九三九年にミンビャー（ラカインの町）に鋭気に富む反英組織の「アラカン民族会議派」ができ、これはタキンと同一のテーゼを内容としていたとされている。「アラカン民族会議派」は「アラカン・ナショナル・コングレス」の訳と見ることができる。

また先のテイン・ペーの文書では、ラカインの反植民地運動はもともとビルマ（本土）のものより弱体だったが、一九三八年～三九年以降にビルマにおける高まり[5]と相俟って高揚したとされ、その担い手としてアラカン・ナショナル・コングレスの名前が挙げられている。さらにテイン・ペーは、これをタキン党の一翼と見做す者もいるとしている。が、ラカインがビルマと別物だとする住民の強い意識[6]のため、タキン党の正式名称のドゥバマー・アスィーアヨウン（我らのビルマ人協会）という名への反発があるので、この名が使われているのだという。

この二つの史料を見ても、アラカン・ナショナル・コングレスはラカインで反植民地運動を活発に行っており、また広義ではタキン党に近い立場にあったことを指摘できる（タキン党がもともと雑多な派閥の総称だった点からすれば、より積極的にタキンの一員に含めてしまっても良いといえる）。

さて、一方ＢＩＡだが、これは日本軍の特務機関の南機関がタキン党の亡命者（アウン・サンらいわゆる三〇人志士）を使い編成していたもので、一九四二年初頭にビルマ「平定」戦闘に参加することとなった。周知のようにこのＢＩＡは、タキン党の根回

しもあり住民が次々と加わり数万人に膨れ上がった。

ラカインに向かったBIAは、三〇人志士の一人ボゥ・ヤン・アウンが率いていたが、これには南機関員の田中中尉（のち大尉）も含まれていた。[7] この田中がその後アラカン・ディフェンス・フォースの日本人顧問となったが、ラカインに向かう中で先に述べたようにピン・ニャ・ティー・ハらも合流したものと考えられる。

第二節　アラカン・ディフェンス・フォースの編成

BIAは次第に雑軍化し、統制がとれなくなってきたこともあり、一九四二年七月に日本軍は改編を要求する。そして約三〇〇〇人だけが、新編の正規軍＝BDA（のちビルマ国軍）に編入されることになる。ラカインに到達していたBIAのリーダーの一人ボゥ・ヤン・アウンも、この地を去って正規軍入りし、田中中尉も一旦ヤンゴンに戻ったようだが、中には一方的な解散命令に戸惑い、なかなか解散しない者もあった。[8]

ラカインのピン・ニャ・ティー・ハの一団も纏まりを解くには至らなかったようで、一九四三年初頭にアラカン・ディフェンス・フォースがつくられた時、田中大尉はピン・ニャ・ティー・ハについては「兵隊を引き連れてやってきた」としている。

やや話を先走らせてしまったが、次にアラカン・ディフェンス・フォースの設立時の状況を見ていくこととする。「田中談話」によると、この方面に敵が出てくるなど情報が緊迫したために、一九四二年一二月に「国境少数民族把握」をなすべく赴任の命を受け、四三年一月に鴻巣曹長[9]と共にヤンゴンを出発したという。シットウェ（ラカイン最大の町）に着くと「原地人が義勇軍の結成を申出てきた」ので覚悟し、顔見知りの元BIAのメンバーなどが「続々集まり」、「アラカンBIAが惣ち出来た」のだという。

一方『トーフランイェー』は、アラカン・コングレスのウー・バ・サンら（他にウー・チョー・ミャや、ウー・ニョウ・トゥン、ボウン・パウッ・ター・チョーらの名が挙げられている）が、将来の対日戦に備えて軍事訓練を受けるために、日本軍を騙して武器を供与してもらいゲリラ講習を受けようとしたことを、同組織の発足のきっかけとしている。[10]

確かに「田中談話」も、ビルマ側が乗り気だったことを伝えているし、タキン党が一九三九年以降、武装化による独立の達成を方針としていたこと[11]を考慮に入れても、彼らが武装化に能動的だったというのは事実である可能性が高い。

しかし、ビルマ軍の要請のみを強調するのも一面的な見方であ

り、日本軍側がこの種の「土民軍」の設置を基本政策としていたことも、見逃してはならない。一九四二年五月一八日付で南方軍は、緬印国境の「最前線ノ警備ハ努メテ緬甸土民軍等ヲ利用ス」、「ビルマ土民軍ヲ独立シテ辺境ノ防衛ニ任セシムル如ク逐次育成ス」という命令[12]を出していた。この命令では、「土民軍」の設置地域は、「緬印国境」「辺境」などの語で表されており、極限された印象を与えかねないが、実際には面積でいうとビルマの四分の一以上の地域につくられている。国境沿いだけでなく、シャン、カチン、ザガイン北部、チン、ラカインなどの山岳部一帯に「軍」の付く住民戦闘隊が見出せるのである。[13]

その中でも、ホウンマリン一帯に置かれた小銃で武装した戦闘隊は、元南機関員の泉谷達郎少尉らが指導したというが、[14]元南機関員が担当したという点ではアラカン・ディフェンス・フォースと同じである。恐らくはその住民工作の手腕が買われ、このような活動に振り向けられることになったのであろう。

さて、次にその構成員だが、既に記したようにアラカン・ナショナル・コングレスやBIA参加者が基幹となったことを指摘できる。しかし「田中談話」には、構成員を大別すると、シットウェ県知事の「ウーオントンウー」（ウー・アウン・トゥン・ウー）とその兄貴分の「ウータンザーラ」（ウー・タン・ザー・ラ）のグループとアラカン・コングレス系（ウー・バ・サンやピン・ニャ・ティー・ハら）とに分かれるとした部分もある。

このシットウェ知事らの話は『トーフランイェー』には見えない。『トーフランイェー』は参加者を、バ・サンやチョー・ミャの影響を受け、ムロウハウンでつくられた武装団（ʼie?ne?kain ta?p'we.）と、これに合流した「ウー・ピン・ニャ・ティー・ハとウー・サウンがつくりボゥ・クラ・フラ・アウンが指導していた武装団」に大別している。日本人顧問としては、田中大尉と永見曹長の名が挙げられている（永見も南機関で田中と共にラカインに向かった経験を持つ）。

この捨象の理由は、一つには「ウータンザーラ」と「ウーオントンウー」が、共に一九四四年以前に死亡しており（「田中談話」による）、『トーフランイェー』が主題とする対日戦には参加しなかったためであろう。また、同書がタキン系の活動家の顕彰を目的としていることからして、非タキン系だったため記録されなかったとも考えられる。

第三節　日本軍の指揮下におけるアラカン・ディフェンス・フォース

『トーフランイェー』は、一九四三年初頭のイギリス軍のメ

ユー半島への反攻に対して、アラカン・ディフェンス・フォースが日本軍に協力して戦ったとする。またこの年には、アラカン・ディフェンス・フォースは、ウー・チョー、ウー・マウン・ニー、ボゥ・クラ・フラ・アウン、ボゥ・ソー・ウーらが指導してパレッワ地区（ムロウハウンの北約一〇〇キロの最前線）を占拠したのだという。

確かに、先に挙げたプリースコット報告[15]では、ピン・ニャ・ティー・ハは、四三年初め頃ラカイン戦で四〇〇～五〇〇のラカイン人を集めて'tat'（軍、部隊）をつくり、日本軍をアクティブに助けたとある。また、「田中談話」でも、三〇〇を超えるメンバー（後さらに増加）に鹵獲小銃を渡し、敵の電線切断・情報収集・手榴弾投げ込みなどをしながら、日本軍の別働隊として作戦に協力した旨記されており、実際にこのようなゲリラ的活動を行っていたといえる。

さらに『ビルマ新聞』[16]一九四三年四月一三日にも、シットウェ県知事の主唱で同地を中心につくられた「防諜団」が、敵ゲリラを撃退し、また偵察活動を行っているとの記事がある。先に記したが、「田中談話」によると、シットウェ県知事もアラカン・ディフェンス・フォースに加入していたというので、この「防諜団」も同隊を指している可能性が高い。

また、パレッワ地区への移動の話は、プリースコットの報告中、クラ・フラ・アウンがアラカン・ヒル（パレッワもここにある）でアラカン・ディフェンス・フォースを率いるようになったとの記載があり、裏付けがとれる。同報告中、クラ・フラ・アウンが四三年八月に、パレッワの部隊を指揮するサン・フラに、部下の義務について指示する手紙を送ったとの記載もある。「田中談話」にも、パレッワ一帯を占領し、待ち伏せで敵の中佐を殺した話や、同地域での攻防事情が詳しく記されている。[17]

なお同隊がこの地に移動した理由について、『トーフランイェー』は、インドに亡命した反日ビルマ人と連絡をとるべく、ドゥバマー・スィンイェーダー党[18]（バ・サンが所属していた）の指令を受けたためだとしている。しかし「田中談話」では、隊員にラカイン人が多く、仲の悪いインド人が多いメユー方面を避けたためだとされる。常識的に考えると、ドゥバマー・スィンイェーダー党の指令で日本軍の付属部隊を動かせるとは判断し難いため、直接には「田中談話」に記された理由がその移動原因だったのだろう。

次に、本章の最後の分析事項となるが、隊長の交代について記しておく。プリースコット報告では、アラカン・ディフェンス・フォースの隊長について当初はピン・ニャ・ティー・ハがリー

ダーで、その後ピン・ニャ・ティー・ハの主席副官（'chief lieutenant'）のクラ・フラ・アウンが直率するようになったとある。これは、ピン・ニャ・ティー・ハは本来僧侶なので、軍事組織としての性格が強まってくると隊長の座を降りることになり、クラ・フラ・アウンを後任としたということであろう。

クラ・フラ・アウンはこの後も長期間リーダーであり続けたが、その前身についてはプリースコット報告で、戦前は犯罪人（'criminal'）でローカル・ガン（'local guns'）の製造者だったとされている。しかし、彼の後の革命家としての行動や、一九四四年に彼と話したテイン・ペーが強い「愛アラカン心」を感じたとしていることから（'an example of an Arakanese Patriot' と総評している⑲）、反英運動家としての精神を持っていたことは否定し難いといえる。「犯罪人」というのも、武装革命を目指し、武器を蓄えるなどしていたことを指すのではなかろうか。

なお『トーフランイェー』では、クラ・フラ・アウンはもともとピン・ニャ・ティー・ハと同じ武装団にいたとされている。「主席副官」の地位にあったということを考慮に入れても、両者はある程度長いつきあいがあったのだろう。

さて、リーダー辞任後のピン・ニャ・ティー・ハだが、本隊と完全に没交渉になった訳ではなかったようである。これは、早い時期に本体と離れたバ・サンらにも当てはまる話だといえる。バ・サンはアラカン・ディフェンス・フォースの創設には関与したが、その後はアーシャ・ルーゲーのオルガナイザーやドゥバマー・スィンイェーダー党の募集責任者を務め、本隊とは離れていたようである。⑳が、『トーフランイェー』によればピン・ニャ・ティー・ハと共に後のゲリラ戦には参加したとある。

同書には、ピン・ニャ・ティー・ハやバ・サンを戦闘部隊と切り離して捉えている箇所もあれば、一体のものと把握している部分もある。結局、彼ら政治僧・政治指導者は、戦闘部隊と即かず離れずその外辺で協力態勢にあったと見るべきであろう。

① 「はじめに」注⑫を参照。この史料は内容から見てテイン・ペーが一九四五年半ばに記したと推定できる。宛名はないが恐らくバサバラ首脳に説明用に記したものであり、その意味では文書（もんじょ）に分類できる。

② 「はじめに」の注②を参照。

③ 「はじめに」の注⑩を参照。また『カイー』一〇五頁には、ピン・ニャ・ティー・ハが一九三八年の反政庁の大ストライキ（主導者はタキン党）に加わったと記されている。また後述するようにイギリスの再来時には逮捕されたらしいが、この逮捕は「はじめに」の注⑫のテイン・ペーの文書によると、戦前の反英活動家リストに照らして行われたのだという。このようにピン・ニャ・ティー・ハは、戦前から積極的に反英活動を行っていたもののようである。

④ これも「田中談話」と同様に丸山氏が所蔵。

⑤ 一九三八～三九年のビルマでは、イギリス資本の石油会社＝バーマ・オイル・カンパニーの労働者ストに端を発し、タキン党が主導する反英運動が高まっていた。

⑥ これは今日でもラカイン人が一般に持っている意識である。

⑦ この間の事情は「南機関外史」（防衛庁戦史部蔵、南西・ビルマ・五六三）や泉谷達郎『ビルマ独立秘史』（一九八九年、徳間書店）などを参照。ラカインに向かった話は、『ビルマ独立秘史』二〇四頁による。

⑧ 例えば、元三井物産社員の桑野福次氏の日記（「ある商社員と大東亜戦」、一九八八年、旺史社）一九四二年九月一三日には、ＢＩＡの「残党」問題が記されている。

⑨ 鴻巣曹長については、前掲の『ビルマ独立秘史』著書の泉谷氏の御教示によると、氏や田中と同じく中野学校出身者だったという。

⑩ 本小稿での『トーフランイェー』の引用は二一五～二二三頁。

⑪ これは、第二次大戦勃発による「イギリスの危機」をきっかけとする方針化である。アウン・サンら「三〇人志士」は軍事支援を求めて日本に亡命し、ビルマに残ったタキン勢力はレッヨウン・タッ（“le?youn: ta?”）やタンマニ・タッ（“thanmani. ta?”）などの私兵を養成することになった。この私兵養成についての研究はあまり多くないが、ビルマ側のものでは、公的編纂物の『ドゥバマー・アスィーアヨウン・タマイン』（“do. bama asi:ayoun: thamain:”, sape bei?man, Yangon, 1976.）、仮訳『ドゥバマー協会史』が詳しい（五〇七、五一一、五三五～五三六頁などを参照）。日本人の作業としては、田辺寿夫氏が「日本軍政下におけるビルマ左翼の軌跡」（田中宏編『日本軍政とアジアの民族運動』、一九八三年、アジア経済研究所、八五頁）で採り上げている。

⑫ 「南方軍関係電報写」所収。防衛庁戦史部蔵、南西・ビルマ・一八四。

⑬ 例えば、第一八師団参謀長の横山大佐の日記（防衛庁戦史部蔵、南西・ビルマ・一一一）には、ミッチーナー地域の「土民軍」が出てくるし（一九四三年一月六日、一一日、一四日）「第一八師団防衛月報」一九四三年五月分（南西・ビルマ・六一四）では、フーカウンの「直接討伐」に出動する戦闘的な住民部隊や北シャンの各種「義勇軍」の活動状況が説明されている。また回想記では、「イラワジ、シッタン作戦における捜索五六連隊関係資料」（南西・ビルマ・六二八）中で村野新一氏が、補助兵力としてカチン、シャン人の「遊撃隊」を編成した旨記し、和田担氏は、クンロウンに設置された「遊撃隊」のことを記している。他に『砲煙シッタンに消ゆ』（菊砲第五中隊戦史編纂委員会、一九七九年、九六頁）にも、英軍と戦うモーフニンの青年隊が登場する。また『朝日新聞』一九四四年七月二二日（日刊）には、チン人部隊の記事がある。

⑭ 泉谷達郎『ビルマに咲いた友情と信頼の花』（一九九六年、日本・ミャンマー歴史文化交流協会）六七～六九、九八～九九頁などを参照。

⑮ 「はじめに」の注②を参照。

⑯ 在ビルマ日本人用に発行された日本語の新聞、国会図書館蔵。

⑰ なお『カイー』一二二頁には、バレッワに日本軍の願問が管理するター・トゥン・アウンらの「ラカイン武装組織」があったとの記述がある。恐らくはアラカン・ディフェンス・フォースの一翼を構成したものであろう。

⑱ タキン党とバ・モオのスィンイェーダー党が、日本占領下で合体させられてできた合法政党。

⑲ 『ウォータイム・トラベラー』二七四頁。

⑳ 前掲『ドゥバマー・アスィーアヨウン・タマイン』二一七、二三三頁、『アシェイアーシャタイッ・ルーゲーミャー・アスィーアヨウン・タマイン・一九四二～一九四五』（解題は「はじめに」の注⑤で挙げた『史林』論文の七三～七四頁）一七六頁。

第二章　対日蜂起以後のアラカン・ディフェンス・フォース

第一節　対日蜂起時

ラカイン地域が、ビルマの反日勢力（アラカン・ディフェンス・フォース幹部も次第に反日色を強める）とインドにいるイギリス軍や亡命したテイン・ペーとの連絡の窓口となっていたことは、『トーフランイェー』や『ウォータイム・トラベラー』に詳しく記されている。元よりこの二著は、片や根拠不明の部分が多い編纂物、片や回想記であり、その内容は再吟味の必要がある。が、根本敬氏が前掲のテイン・ペーの文書（DR34）を紹介したことにより、共闘に至る概要の記載は、概ね事実と認められるようになったといえる。

『トーフランイェー』では、一九四四年八月頃から反日レジスタンス訓練のため志士をインドに派遣するようになったとして、ピン・ニャ・ティー・ハを含め送られた二〇余人の名が挙げられている。また前掲DR34によると、一〇月にはアラカン・ディフェンス・フォースの二〇人がインドに派遣されたという。一二月には、英印軍に六〇の短機関銃、五〇〇の手榴弾を供給してもらい、テイン・ペーの盟友のニョウ・トゥンは、英軍のカーリュー少佐と共にパラシュート降下をしてビルマに復帰した。このカーリュー直率隊は、二五〇人程度の現地人を集めたという。

英印軍第一五軍団の一九四五年一月二九日の報告①では、二〇〇のラカイン人で編成された部隊が英軍指揮下に五〇の日本兵を殺したとあるが、人数から見てこれはカーリュー隊のことであろう。なお『トーフランイェー』では、ニョウ・トゥン隊の一部は中国人少佐に率いられ、ライオン（c'indhe.）党の名でゲリラ活動を行い、これにボウン・パウッ・ター・チョーらが加わったとされている。

このような英軍直率のゲリラに対して、アラカン・ディフェンス・フォース、即ちクラ・フラ・アウンらを主力とする隊は、どのように対日蜂起と関わったのだろうか。『トーフランイェー』の記述では、カーリュー隊の活動とそれとの共闘を認めつつも、この地区での実戦（ゲリラ戦）の中心的担い手としてはむしろアラカン・ディフェンス・フォースの方を強く意識している。

その記述を幾つか抜き書きすると、「一九四四年一二月末にチ

ャウットー町区でクラ・アウン隊とソー・ウー隊は蜂起を始め、日本兵三人を殺した。一九四五年一月一日には、プラデーに駐屯する日本軍を、ピン・ニャ・ティー・ハとボウン・パウッ・ター・チョーの隊が攻撃した」「クラ・フラ・アウンが指導する隊は、グェータウッチャウン村で日本兵を一人殺し、タンゲードー村でも何人かを殺し、さらに連合軍に連絡して空襲してもらった」「四五年二月一四日には、クレイットー村にサン・フラ隊のボウ・ター・チョーの部隊が到着し、ムレボウン町区に至る道々で戦闘が起こった」―などというのである。このように『トーフランイェー』では、クラ・フラ・アウン、チョー・ミャ、ソー・ウー、マウン・ニー、サン・フラなど、第一章でも名の挙がったアラカン・ディフェンス・フォース幹部の戦闘の様子が詳述されている。

しかしこの時の戦闘規模は、実際のところそれ程大きなものだったとは考え難い。蜂起が始まる前に日本軍は、既にシットウェ、メユー地域を放棄することに決しており、蜂起が始まろうとする一九四四年一二月二八日には、騎兵第五五連隊を殿軍に残して退却が始まっていた。この撤収は迅速であり、移動状況から見て、最もゲリラの攻撃を受ける機会が多かったといえる同連隊にしても、四四年半ば以後この地からの撤退が完了するまでの損失を戦死・不明五六、負傷三一としている（「騎兵第五五連隊戦史資料[2]」）。もちろんこの数字は、英印軍との戦闘によるものを含んでいる筈であり、ゲリラの戦果はこの一部ということになる。このような傍証から推定しても、それ程大規模な戦闘があったとは考え難い。

戦闘規模はともかく、この時期にアラカン・ディフェンス・フォースが、ある程度目立った、イギリス側にとって無視できない存在になりつつあったのは確かである。また、ビルマ（主に本土）で成長しつつあったパサパラとの接触も本格化したようである。

例えば、再三引用している一九四五年三月一七日のプリースコット准将の報告では、ピン・ニャ・ティー・ハとクラ・フラ・アウンの部隊が紹介されているが、彼らは蜂起の後、パサパラに加わり「パラレル・ガバーメント」（イギリス側の政治権力に対抗する別の政権の意）をつくろうとしているとされている。

また三月三日のチェトル准将（在ラカイン）の報告[3]でも、パサパラが、クラ・フラ・アウン（及びカーリュー少佐）の命令を妨げないようにとの指示を出しているとされている。パサパラが実際にこの命令を出したか、チェトル准将の誤判断なのかは不明だが、いずれにせよクラ・フラ・アウンが実力者になっている（若

しくはそう見られるだけの存在になっている）ことがわかる。

それではその実兵力はどれ程だったのだろうか。この点について『トーフランイェー』は直接に説明しているわけではないが、次の説明が参考になる。――アラカン・ディフェンス・フォースは対日蜂起中に、ポウンナジュン町区のセッター村で本格的な軍の形態を備えた「愛国ビルマ軍ラカイン隊」に編成替えをし、その隊長にはクラ・フラ・アウンが推挙され、ソー・ウー、クラ・ニー・アウン、サン・フラ、ソー・トゥン・アウンらが一五〇人ずつの長となった。

これをそのまま信じるならば、部隊の人員は一五〇×四で、六〇〇人ということになる。プリースコット報告では、一九四三年に四〇〇～五〇〇人とされており、「田中談話」では結成当初の三〇〇人がさらに増えたというので、定員が六〇〇人というのはまず妥当な数字だといえる。

第二節　日本軍敗退後

前掲のテイン・ペーの文書（DR34）では、イギリス側がラカイン戦の終了後、愛国ビルマ軍ラカイン隊の「反英分子」の逮捕に乗り出したとされている。『カイー』によると被逮捕者は、ウー・ピン・ニャ・ティー・ハ、ウー・ナー・ヤ・ダ、ウー・テイン・チョー・アウン、ウー・マウン・ニー、ウー・チョー・フラ・ウー、ウー・マウン・チョー・ザン、ウー・クラ・アウン、ウー・タ・ドゥー・ウー、ウー・チョー・ミャ、コゥ・ター・トゥン・アウンらだという。④

このうちにピン・ニャ・ティー・ハ、マウン・ニー、クラ・アウン、チョー・ミャの四人は、『トーフランイェー』で実戦の指導者として名の挙がっている者である。結局彼らは、カーリュー少佐の訴えもあり釈放されるのだが（DR34）、『カイー』からも読みとれるように、この逮捕はビルマの民族主義者の対英不信に輪をかける結果をもたらしたといえる。

『カイー』では、このような「イギリス帝国主義の抑圧」に対抗すべく、ボウン・パウッ・ター・チョー、シュエ・チョー・ウー、ニョウ・トゥンらが一九四五年四月に動きだしたとされる。団結して戦うこと、革命戦のためビルマ（本土）と連絡をとることを決め、またクラ・ニー・アウン、サン・フラら（それぞれ愛国ビルマ軍ラカイン隊の部隊長とされる）と酒を酌み交わし、「イギリスを許すなら死にたい」などの決意を語ったという。そして住民を組織して平和裏に独立闘争を続けつつも、武器を隠し兵士を密かに養う方針が樹てられたという。⑤

この後ボウン・パウッ・ター・チョーは、自ら出向いてヤンゴ

ンのパサパラと連絡をとり、パサパラ内の共産勢力と接近、初秋にラカインに戻ると、ウー・セイン・ダーや、釈放されたピン・ニャ・ティー・ハを表に立てて、政治活動に奔走したという。そしてラカインにパサパラ支部がつくられ、議長はピン・ニャ・ティー・ハ、書記長はチョー・ミャになったとされる。[6]

この人事については、一九四六年三月一一日にシットウェで、アウン・サンやタキン・ミャを迎えて開かれた人民会議で、ピン・ニャ・ティー・ハが議長を務めたことからすると（『ミャンマ・アリン』[7]一九四六年二月二三日、三月二二日など）、恐らく事実だといえる。

また、愛国ビルマ軍ラカイン隊が武装組織として存続していたこともビルマ国防省所蔵の一次史料から裏付けられる。例えば、一九四五年一〇月一日付けで愛国ビルマ軍司令部が英第一二軍に提出した文書（DR4863）では、ラカインのゲリラ約五〇〇人に、愛国ビルマ軍扱いで給与の給付が予定されている。さらに、一二月三日付けの愛国ビルマ軍ラカイン隊司令官が署名したメンバーのリスト（DR380）[8]では、総員が五一七人とされている。その構成は、クラ・フラ・アウンの一四二人のグループ、サン・フラの三〇人、ソー・トゥン・アウンの九八人、ソー・ター・アウンの六〇人、ライオン・グループ（元はカーリュー隊に属していた一団）の一五八人などである。

先に見たように『トーフランイェー』は、この年初めの愛国ビルマ軍ラカイン隊編成の際、隊長はクラ・フラ・アウン、一五〇人長はサン・フラ、クラ・ニー・アウン、ソー・ウー、ソー・トゥン・アウンの四人だったとしている。一隊あたりの人数はかなり食い違い、またカーリュー系の部隊が入るなどの変化はあるものの、幹部名からすると一応は年末にも、この時の編成が受け継がれていたといってよい。

この後のラカインの情勢は、『カイー』によれば、ウー・セイン・ダーを名誉総裁とするラカイン青年組織が新設され、パサパラやその他の組織と連携して対英武装蜂起をなすべく組織化が進められたとある。例えばラカイン隊のソー・トゥン・アウンは、ラカイン青年組織の選抜講習会に出席（講師としてであろう）した旨記されている。[9]また、クラ・フラ・アウンはラカインPVOのリーダーとして登場してくるが、これは愛国ビルマ軍をめぐるイギリス側とビルマ側のせめぎあい（イギリス側はその縮小を図っていた）の中で、このゲリラ隊が正規軍からは外され、PVOに組み入れられたということであろう。

クラ・フラ・アウンは、一九四六年八月の全ラカインパサパラ会議[10]、一九四七年八月の全ラカイン左翼統一連合隊結成時の会議[11]

に、PVO代表として参加したとあるが、実際のところ最も有効な戦闘力を持っていたのは彼らの部隊だったといえよう。⑫

① 『バーマ』八四番（上）'Headquarters 15 Indian Corps to Advanced Headquarters ALFSEA'.

② 防衛庁戦史部蔵、中央・部隊歴史連隊・一四一。戦後記された冊子だが、自軍の死傷者数は、当時のメモなど信頼性の高い史料を根拠にしていると推定でき、概ね正確な数字であると考えられる。

③ 『バーマ』九八番（上）'Brigadier G. Chettle CAS (B) to Deputy CCAO'.

④ 『カイー』一六、一九、一二二頁など。

⑤ 『カイー』一六～二六頁。

⑥ 『カイー』二六～一一四頁を要約。

⑦ この時期の『ミャンマ・アリン』紙（ビルマで発行されていた新聞）は、"bojou? aun s'an: i. lu?la?ye: co:ban:m'u. la.zinm'a?tan: 1945-47" (me-myo. k'i? s'we, bəgan sa-ou?, Yangon, 1980.）所収分を参照した。

⑧ これらのDR資料については「はじめに」の注⑫を参照。

⑨ 『カイー』一五五頁。

⑩ 『カイー』二二〇頁。

⑪ 『カイー』二七〇頁。

⑫ なお『バーマ』にも、この時期のラカインゲリラの活動に関するイギリス側資料が多数収められている。その主なものの番号だけ記しておくと、三四、五七、八六、一〇四、一一〇、一二八番（全て下巻）。このラカインゲリラ問題は、一九四七年六月一二日にはイギリス議会の下院で取り上げられるまでになる（"Parliamentary Debates Commons" Vol. 438, His Majesty's Stationery Office, London, 1947, pp. 147-148.）。

まとめと展望

以上のように、日本軍が「土民軍」の一隊として設置したアラカン・ディフェンス・フォースは、タキン党に近い立場のアラカン・ナショナル・コングレスやBIAなど、それまでに展開されていた民族運動を母体としつつ成立した。そして、比較的早い時期から反日活動を始め、英軍とも連携した。さらに、対日蜂起を行う中で愛国ビルマ軍ラカイン隊に改編され、その頃英軍が編成したゲリラ隊の一部とも合流した。後には正規軍の座を外され、PVOに組み込まれたようだが、何れにしても、旧タキン党各派が統括する諸勢力がパサパラに結集する中でその傘下に組み込まれ、それをこの地で支える役割を果たすこととなった。

しかし、早くも一九四七年には彼らにはパサパラを離脱することになり、以後は共産勢力として反政府戦を展開することになるのである。この内戦の分析は、今後資料収集を続けつつ機会があれば行いたい。

このように、日本占領期からその直後にラカインの民族運動勢力はドラスティックな経験をした。それでは、果たしてその過程

で、この運動は「高次化」したといえるのだろうか。

今回の分析では、専ら軍事面に注目してきたので、彼らの反英感情や独立心（ラカイン単独での独立と、ビルマの一部としての独立の二つを含む）が高まったか否かというような、精神的「高次化」の有無については結論を出すことはできない。

また、組織化がどの程度進んだかという点についても、戦前のこの地域の民族運動のレベルを、一次史料で明確にできるわけではないので、現段階では断定調で結論を下すのは危険である。

が、少なくとも軍事的習熟という意味では、「高次化」と捉え得る状況が生まれていたといえる。アラカン・ディフェンス・フォースは、この時期に様々に近代兵器を使用しての戦闘経験を積むことができたのであり、それは暴力的・破壊的意味を伴うものではあるが、「高次化」ではあったといえる。そしてラカインの「高次化」は、バサパラに組み込まれることで、その権力強化にも寄与したといえよう。

だがその「高次化」は、以後の内戦の前提としても重要な意味を持ったといえ、独立ビルマの国家建設に良かれ悪しかれ無視できない影響を与えたことになる。

〈付記〉本稿は一九九七年文部省科学研究費補助金（特別研究員奨励金）による成果の一部である。

（名古屋大学文学研究科博士後期課程）